

國東半島昔話

宮崎一枝

目次

- 一、大歳の日の話
大歳の火、貧乏人と棺箱、大歳の客(1)、(2)、金の神と貧乏人
ものいう亀、ひつこう、吸いっこう
- 二、動物報恩
猿報恩(1)、(2)、山姥の礼(1)、(2)、狐報恩
- 三、人と狐
狐の八化け皮

一、大歳の日の話

大歳の火　むかし、お庄屋さんに下女が来たち。とりつ

きの晩にお庄屋さんが、「おまや火を失わんように」ち云うのじ、燃え木じりをクドん中に突っこんじよいて、朝吹いておこしよった。一年中火をたやさんじやったら褒美をやるち。一年間、年の夜まで絶やさんじやったのが、年の夜の晩火をさやしてしもうた。元日起きてみたら火が消えちよる。

どこか行て火を貰うてこうと思うて見よつたら、火がチロチロ燃えよるようにあるんじ、行つたんじや。(そこへ)そき行たら、盗人ぬかどか知らん、恐ろしいような男が火を焚いて温みよつた。

「すまんこつちやが火をくれんか」「ああ、やしいこつちや。

そんなかりこつちも頼みがある」「でくるとらする」「これほんなら持っちかいっち、なっとか始末しておくれ」ちゆて、羨みたいなもんをくるるんじや。女中さんな恐ろしゆて

(しまつて)

こたえんけんど、「ほんならどこかなおしてあぎよう」ちゆち火を貰いだして持つちかいっち、古俵を物置の隅にじつとおいちあつたんじゃ。急いで朝御飯ぬ炊いち、昼になつてなんとかしようと思つたんじゃろう。朝御飯をたべて下女が後片付けをしよる間に、お庄屋さまが物置に行つてみたんじゃ。みたところが、俵の中から小判がいっぱい、あばけ出るほど入つちよつた。下女に詮議をしたところが白状したんじゃ。

下女が一年火を失わんようにしたほで、^(の)良いことがあつたんじゃ。すこんすこん米ん団子。(話者 宮永コユキ 六十七

才 国東町来浦)

貧乏人と棺箱 貧乏なうちで、金は類をもち集まるち云うから、貧乏人が銭を貼つちよつた。福の神が「分限どんかて行こや行こや」ちゆたら、バリバリって離れて行たち。ありもせん銭を貼つちゆたら、逃げて行てしもうたち。

歳をとりよつたら、人が来て、「置いておくれ」ち、大きな棺箱だんばこを持つち来たと。棺箱なんの来たがと思つたが、置いちやちよつたら、夜が明けても取り来んのじゃ。見たら、お金がいっぱい入つちよつたて。すこんすこん米ん団子。

(話者 矢野ステ 八十才 安岐町上山口)

大歳の客 (1) きたねえ勧進坊主が来て、どこでもいいほ

で、宿を貸せちゆうけんど、貸し手がねえ。金持は泊めてやらん。貧乏人が、きたねえ所でもかまわんなら泊つちよくれと泊めてやると、朝間あさま起きんほで、ごはんがでけたちゆて起しに行つたら、金になつちよつた。そんな、金持がきたねえ勧進に泊れちゆて泊まらしてやつて、良い蒲団に寝せた。朝間になると、ゴソゴソ起きて出て行つた。行つてみたら風がいっぱい落ちてちよつた。すこんすこん米ん団子。(話者 宮崎シオ 六十九才 武蔵町内田)

大歳の客 (2) 歳の夜の晩、座頭が泊つち、いろりの中に

突つこんだら鍋銭じやつた。それぎりん米ん団子。(断片か

。国見町竹田津)

金の神と貧乏人 歳の夜の晩、金の神がまわりよつた。馬に金を負おうせて行きよつた。恐ろしゅうで斬りきらんじやつた。一番後からのを斬つたら天保銭じやつた。それぎりん米ん団子。「貧乏神」の断片か。国見町竹田津)

物云う亀 まあ、爺おじいと婆おばがあつたげな。「きようはじいじい天気がいいき、柴切りやめち荒野あらのうを拓ひらき行こや」、「そりゃいい」ちゆて、ヒゲ餅(種)をつくつたち。ショウウケに入れち

持って行たち。ゴツンゴツン、ゴツンゴツン掘りよったけん
 ど、くたびれたきちゅうてよ(からといつて)かいよったて。そしたところが、
 プランプラン、プランプラン(賑)ねぶりだしたち。ヒゲ餅う取り
 落ちいたて。餅がコロンコロン、コロンコロン、転がりてえ
 た。どげしても取れん。石をおこしおこし取って行きよった
 ら、(魚)コウズが一匹おったち。爺さんと婆さんが出しち、石の
 上においちかわいがりよったち。「婆さん正月が来たが、何
 で年をとろうか」ち爺さんが云うたら、「年々米でとらいの
 」とコウズが云うたち。「おお、こりゃ話をするコウズはめず
 らしい、ま一遍云うてみようや。コウズ、コウズ、コウズや
 正月は来たが、年々何でとろうか」、「年々米でとらいの」ま
 た云うたち。「こりゃいい。お奉行さまん前に行ち、ものを云
 わしてみようや」ちゅうて連れて行たち。爺さんが抱いち行た
 んじゃ。「きゅうは殿様、殿様、わしちものを云うコウズを連
 れて来たが、云わしてみろうかえ」、「おお、云わしちみよ」、
 「コウズ、コウズ、コウズよ、正月は来たが、年は何でとろ
 うか」、「年は米でとらいの」、「もう一遍ゆわしてみよ」、「コ
 ウズ、コウズ、コウズよ、正月は来たが年は何でとろうか」、
 「年は米でとらいの」、「こりゃ珍らしい」、家来に「褒美を

つかわしい」ちゅうたて。お金やらお米やらいっばい貰うた
 ち。それから持ってかえつての、婆さんに話したらしっか
 りよろこうだち。爺さんがままでえちたべよったち。たべよ
 ったところが隣の欲婆さんが来て、「(飯)こんたあたち、朝喰う
(おまえたち)もんも晚喰うもんもねえに、米んめし喰いよるが、どげした
 んか」、「荒野を拓ぎ行て、よかいいをしよたら、ヒゲ餅を
 とりおちいての、コロ、コロ転げち行く餅を追うて行たら、
 コウズがおつての、そのコウズがもぬう云うコウズで、コウ
 ズ、コウズ、コウズよ、年は何でとろうかち云うと、年は米
 でとらいのち云うんじゃ。それから殿様にみせたところが、
 殿様がお金やら米やらいっばいくれたんじゃ」ち話してきか
 せたち。そしたら、隣りん婆さんが、「そのコウズを貸せ」
 ちゅうて抱いてつれていんだて。「爺さん、爺さん、隣りい行
 ちみたら、こげこげじゃった。うちも(お前さん)こんたあ持って行かっ
 しゃりい」ちゅうたて。爺さんがお奉行さまの前持っていた
 らの、「殿さま、殿さま、もぬう云うコウズを連れてきたが、
 褒美をくれんかい」ちゅうて「コウズ、コウズ、正月が来たが
 年は何でとろうか」ちゅうたが、コウズはなあも云わんで。
 また「コウズ、コウズ、コウズよ、正月が来たが年は何でと

ろうか「ち云うたが、なあつとも云わんち。」(早く)「はい家来ども、

こんなたばかりのような者は、ケツに斧きを打ちこめ」ちゆうて

打ちこまれたち。爺さんがちんばをひいち、血を垂らしながら

ら去んだち。婆さんが、金襴緞子を貰うて戻つて来るんじや

ちゆうて待ちよったち。爺さんが、今日はこげこげじやった

ち云うたら「そげんコウズはクドん中にそでくうじしまえ」(突きこんで)

ちゆうて、クドん中にくべたち。良い爺さんと婆さんがなんぼ

待つても戻しち来んので連れに行たら、「何もものを云わん

き、クドん中にそでくうだ」ちゆたち。灰をソラクチ(苗を

入れる物)に入れて貰うて去によつたら、風がぶーと吹い

て来たち。灰をふり散らしたち。冬じゃもんで葉が落ちて枯

れちよつたのに、花が咲いたち。これは結構じゃ、また殿様

の所に行こうやちゆうて、「お殿様、お殿様、枯木に花を咲か

しょうか」「咲かしてみよ、灰をまいたら咲いたち。「こう

りや珍らしい」ちゆうて御褒美を沢山くれたち。爺さん、婆さ

んが持つて帰つたら、また隣りん欲婆さんが来たち。爺さん

と婆さんが、こげこげじやったちゆうて話したら、隣りん爺さ

んと婆さんが灰をもつち奉行さまんかて行たら、殿さまん目

すこ米ん団子、(たくさん)よき喰や腹へあたる。(話者) 稻積チセ 七

十三才 姫島村稻積)

ひつつこう 爺さんと婆さんがあつて暮らしよつた。大歳

の晩に門から「ひつつこう、ひつつこう」と云うのじやて。

「妙なことを云うのう、出てみるか」ちゆうて爺さんが出てみ

たち。そうすると「あつちに向け、あつちに向け」ちゆうち

。爺さんも云うごてなつて、あつち向いたて。そしたら冷め

てえもんが来て、ペツタリ背中にひつついたて。それから戻

つたて。「婆さん、婆さん見てくえ」(くれ)ちゆたら、小判がペ

ツタリひつついちよつたて。「爺さん、嬉しいこつちゃ、御

馳走しようえ」ちゆうて、翌る日御馳走してたべよつたて。そ

したら隣りの欲どう爺さんと欲どう婆さんが来たて。「あん

たどう、朝喰うもんもねえ、晩喰うもんもねえに、どうして

米んままを喰うもんがあつたかえ」、「どうもこうもねえ、門

からひつつこう、ひつつこうち声がするき、爺さんが出ちみ

たら、小判がペツタリひつついち来たのじゃ」ちゆたち。「そ

げなこつなら、こいさ、うちの爺さんも出そう」ちゆたち。出た

ところがまた「ひつつこう、ひつつこう」云うち。爺さんが

り来てひつついたちな。うまいことじゃと思うちな、婆さんに見せた。見せたところが松脂がベツタリひつついちよちちゆうのじゃ。落しても落てんで。「火をつけてきてえ」ちゆき火をつけたら、爺さんを焼き殺してしもうたち。米ん団子。(話者 稻積チセ)

吸いつころ (火歳の日は云わないが、これは部分的に少しモテーフの変った右の話の類話である)

むかし、山に爺さんがタキモンを切り行いちよったんじや。婆さんが弁当持って行たのじや。行きよつたら「吸いつころか吸いつころか」ちゆうのじゃ。「爺さん爺さん、来よつたら木のうらから吸いつころ吸いつころちゆうもんがあったが、なんかなあ」、「吸いつころ吸いつころちゆうなら、吸いついてみよて云え」ち爺さんが云うたんじや。帰りよつたらまた「吸いつころ吸いつころ」ち声がすんのじ、「吸いつききんなら吸いついちみよ」云うたらな、(たくさん)ようけなことお金がありち来ち吸いついたとこ。爺さんがかいりよつたら、婆さんが動ききらんごと吸いついちよつたち。まあ、よかつたなあちゆて、そん晩は魚買うたり、ごっそうしたりして食べよつたとこ。そしたら隣の婆さんが来て、「これな銭が

ねえ、米がねえちよつたが、大したごっそうじゃあなあ」ちゆうたて。「へえ、今日は爺さんが山行いちよるのに弁当持ち行たところが、木の末ちから吸いつころ吸いつころち声があるんで、吸いつききんなら吸いちいてみよちゆうたら、お金がようけなこと木のうらからおりち来ち吸いちいて来たんじ、ごっそうして食いよるんじや」。そしたら、うちん爺さんぶも山へやろうちゆて、「爺さん爺さん、山へ行きよ。わしが弁当持ち行くから。大した良いことがあるそうな」。爺さんが行ちよつた。婆さんが弁当を持ち行きよつたら、また「吸いつころか吸いつころか」ち声があるほど、「吸いちいてみよ」ちゆたら、何かいっぺえ来て背せなげ中へ吸いちいたて。「ばばんな、どげえじゃろうか」ちゆうてかいりよつたら、どげえもこげえもならんほど松脂ぶが吸いついちよつたち。爺さんなす、とつちや火にくべ、とつちや火にくべ、皮がむくるほどとつたけんど、とりきれんじやつたとこ。すこんすこん米ん団子。(話者 矢野ステ)

二、動物報恩

猿報恩(1)、薬屋と猿 むかしむかし、薬屋さんがな、山

ん峠を越すのに、「もう遅うなつたほど越すめえか」ちゆて腰かけちよつたら、谷で猿がキヤツキヤツなきよつたち。行てみたら、お猿さんがお産をしよつた。男猿が薬屋さんに手を合わすのじやて。薬屋が袂の中を探したらあつたほど「これをお産が軽うなるほど飲ませちやれ」ちゆて、やつたそうな。男猿が口うつしに水をくくんでのませちやつたら、子でけたて。お猿は先んことがわかるてな。薬屋さんが行きよつたら何か冷めてえもんを袂に入れてくれたち。そしてそこん山を越しち行きよつたら、木の下にチヨロウチヨロ火のあかりがしよつたて。もう遅いほどここに泊ろうと思うてな、

そん小屋に行ちみたら、白髪ん生えた古いお爺さん（よぢ）がひとりおちち、火をチヨロチヨロ焚きよつた。薬屋さんがそけ（そけ）「もう遅いほど泊めちおくれ」ちゆて寄つたら、お爺さんが何も云わんで「はいはい」ちゆて首をくんずけたて。薬屋さんはイズリ端（はた）に寝ち、うつらうつらしよつたら、大けな大蛇（おへび）が来ち、薬屋さんの枕に來ち口をはつちよる。何か投げてえと思うて枕もとをみたら、冷めてえもんがあつたて。それを夢うつつじ投（な）んかけたちゆうのじや。そげえしよつたら夜が明けたほど起けてみたら、家は大けな楠ん木じやつたち。冷めて

えもんは、なめくじじやつた。猿は先がみゆるちゆうほで、わかちよつて、なめくじを入れちやつちよつた。大へはとけちよつたち。楠ん木は化けるほで、家にもつこうもんじやねえちなあ。すこんすこん米ん団子。〔話者 猪股マサ七十七才 国東町富来〕

猿報恩(2) 薬屋と猿〔前述の話の類話〕

むかし、薬屋が山越ししよつたら、猿が出て腹を撫でて手を出すのじや。腹がせくならこれ呑めちゆて腹薬出しちやつた。二、二ヶ月後また通りかかつたとき、小せえカヤスポをくれたち。また薬を欲しがつてくるるのじやちゆてう（捨てて）つせて逃げたち。こんだ若え娘を連れちな宿に泊ちよつた。無理しやり戸の隙間からおしこうでくる（くるる）ので、そのスポをほどこちみた。二人の前でみたら、なめくじがいっべ入ちよつたち。こりやあまあちゆて、二人の間でひろげちみたんじやが、女（おんな）がパーツと消えしもうたて。そん女は蛇じやつたろ（はしめ）う。はな猿を助けちやつたほで、こんだ猿から助けられたんじや。すこんすこん米ん団子。〔話者 河野多助 七十二才 国見町富来大恩寺〕

山姥（おば）の礼(1) 昔な、あつちなあ、山姥（おば）があつちな。忠兵衛

さんかた人民を助くる人じゃった。奥の山から忠兵衛さんの親切を聞いてち屋敷をたずねもとめち、やってくるのじゃ。忠兵衛さんの奥さんが出ち来ち、「今晚お宿を貸しておくれませんか」ち云うのじゃ。「旦那の帰るまでよかえ」ちゆてよかいよつたら、帰つて来た。奥さんが云うことを聞いちやつちおくれち云うのじゃ。「おう、おう、どこの人かしらんが、わしのような貧家ひんかをたずねてくるのはどなたかえ」、「わしは千里奥山の山姥じや」。たまがった。「何用があつて来たんか」、「わしは無心がありますので。この月に子供がでくるのでお産場がないが納屋を貸しちくりい」て。「貸しちあぐるなあぐるが、馬屋のうちならお貸し申す」。庭筵やら古着やら貸したんじや。男ん子が一人でけた。山姥が七日たつてから家に子が二人あるから山にあがるという。師走の十五日じや。あけて正月の夜中に山姥がお礼にくんのじや。おさん、忠兵衛さんをおこして、たんぬんのじや。「去年冬年おせわになった千里奥山山姥じや」ちゆて名乗りをあぐんのじや。三寸角の桐の箱を非常にいわいたてて二つくれた。「おさんさんと忠兵衛さんにあげます。それからわたしの子供に名前をつけちくれんか」。忠兵衛さんが考えて、一番上に「なつよしこう」、「あきよしこう」、「ふゆよしこう」ちつけた。お礼の箱から「あんたが一代この箱をあくれば使うほどの

金が出る。おさんにあげたのは一代織つて使うほど糸が入つちよる」ちゆてあげたて。ぶすぶすの米ん団子。(話者 石川リキ 国東町富米藁藁)

山姥の礼(2) (1)の類話。要約して述べる)

(一) 善人ちゆうごく忠兵衛の家に雪の降る日、山姥が庭筵を貰いに来たので与える。(二) 留守をしていた妻のおさんが帰つて来て山姥を呼び戻して薪小屋を貸してお産をさせる。(三) 七日目に男の子を三人産む。(四) 頼まれて忠兵衛が「はるよし」、「なつよし」、「ふゆぬくどう」と名前をつける。(五) 正月十四日の晩、山姥が打出の小槌をもって礼にくる。(六) 小槌からは

一代使うだけの金と糸が出る。(話者 田川耕作 九十才 国東町富米大恩寺)

狐報恩 むかしむかし、子持狐がおつて、山焼きじゃちゆて「ここにおつたら助からんが、だれか助けてくれんか」ち云いよつたら、男の人がついて来いちゆて、ついて行ちたち。(たくさん) ついて行ち助かつたち。そんお礼にすっかりお金をもって来てくれたち。(話者 稻積チセ 七十三才 姫島村稻積)

三、人 と 狐

狐の八化け皮 香々地のエンシヨウ寺の坊さんが笏をにぎつて、「天から来た神様じや。お前のは狐の七化けちゆて八

化けなからな役に立たん。おれが授くるき七化けの人皮を渡せ」ちゆうて欺しとつた。欺しとられた狐の奴が代りの物を持ちちハレダバルによる化けて出よつたが、「何ともしれんもんを着ち、ぬひと狐がこけなおるが」ち云わるんのじ、はがいき、カマワルのオトシヨウ、ネコイシのネコシヨウ、アカサカのアカシヨウの三匹の狐に頼んだ。カマワルのオトシヨウが上から下つた管長になつち、高田（かみ）新開（ま）に新規な家ができち、エンシヨウ寺の和尚に出てけて呼び出しがあつた。檀家を四、五十できちよるのをやるからと云うんじ、和尚は喜こうじ行たんじや。「管長さんにお土産は何をやるう。高田にや、なんでんある、虱ん漬物でんあるちゆうが、何やろうか」、「管長様じゃき何でももらやせん」、「おらあ裏ん山ん狐を欺けて人皮をとつたが、これがよかろう」ちゆうことになつち人皮をさしあげた。管長に化けたオトシヨウが受けとつたんじや。坊主はだまかされち、今が今まで大きな家人中で管長さまがおつちよつたのが、なあもおらんじ、ポーツと新開の川土手にひとりて坐つちよつた。坊主がま一遍欺かそうと思うち、また笏を振つち「おれは天から降つたもんで、お前ん人皮は人間の手にあたってから役いたたんのじや。おれが上にもつちかいつち、しなおしやる」。こんだ狐が欺かされんでくれん。坊主はたぶらけてやろうと思うち

な、ハレダバルに人間の女子（おたこ）の衣裳をもつち行た。狐が出ち来たんじ、「こりやこりや、われがなア尻を見よ、化けちよつてん尾を挟うじよるじゃねえか」。そしたら狐が「そりやあんたどうしてわかるか」。「そりやあわかる。おれも狐じや。おれが女子になつてみしようか。おれがこくう美しい女子に化けて出てみるき、尾が見ゆるかどうか見よう。狐が見よつたら立派な女子が通る。「いや、あんたのは見えん」、「おれがもう一遍化けちみしようか。坊主になるぞ。衣裳を脱いじみせる。「お前のは役に立たんのじや。人があつたきいわりいんじや」、「ほんならあんたのと換えてくれ」。女の衣裳と換えたち。狐は化けち出たけんど化けられんで「あの狐みよ、ひとり狐が女子の着物をとつち来ちまわりよら」ち云わるんのじ、寺に火をつけち焼いてしようた。（話者 村田義雄 七十五才 安岐町諸田）

ちなみに「大分県郷土伝説及び民謡」には「鈴ヶ谷の狐と僧」として、次のように収録されている。(一)小崎延寿寺の小僧が悪戯者で、横嶺の神官の束帯を借り白馬に跨つて鈴ヶ谷に行き、(二)伏見稻荷大明神の命令で宝珠を取調べに来たと狐を欺して宝珠をとりあげ、そのまま京に上る。(三)狐は寺に放火すること三度に及んだので、住職と里人相計つて稻荷祠に祀つたと。

(北海道郡佐賀岡町在住)